



理科のための語彙力

明けましておめでとうございます。千葉市の生徒たちは昨年と同様に短い冬休みのため、冬期講習も短期集中となってしまいました。特に今年はコロナの影響で学び残しもかなりありそう。それを取り戻すには時間が足りなさすぎですが、なんとか乗り越えましょう。

さて4年に一度、主に基礎的な学力を測るTIMSS（国際数学・理科教育動向調査）の結果が先日発表されました。全体的に大きな低下はないものの気になることもあります。例えば小4理科の平均点を下げているのはなぜかということ、絵の中から生きているものと生きていないものを見分ける問題の正答率が半分以下で、国際平均を下回っていました。「生き物」には虫も植物も含まれることがピンとこないようなのです。言葉を知り、言葉で考えることが理科や算数・数学にもとても大切だということが実感としてわかっていない人が多いようにも感じます。もちろん個人差はあります。図鑑が好きでそこに描かれている図版とその説明とをじっくり読みこんでいる人にはなんでもない問題でも、そういう興味も体験もない人には難問に思えたかもしれません。広い意味の語彙力（ごいりよく）が不足しているとも言えます。中学理科で最後に習う天体の分野にしても、「日周運動」と「年周運動」の違いや「銀河系」と「銀河」の違いなどを言葉で理解できる人とそうでない人がいます。

私が週2回の作問を担当している「天声こども語読解問題」でも「読み飛ばし」を防ぐとともに、「言葉や表現をよりたくさん知ってもらおう」ためにはどうすればいいかを考えながら作っています。朝日学生新聞社のチェックも毎回受けているのですが、小学校高学年でこの言葉を使った質問をしていいのかなどと迷うこともあります。「そんなこと言っても、科学者になれば数式と記号だけですむでしょ。」という塾生の声には「ノーベル賞級の科学者は文章を書いて人に伝えるのも上手なんだよ。」と答えています。

新しい年、言葉を操りながら自分の世界を新しい知識で広げ、そしてそれを楽しめるようになりませんか！